

福沢 諭吉 ふくざわ ゆきち
(1835～1901)

MENU

- 1 福沢諭吉が大隈重信にスタチスチックの仲間らを推薦した書簡について
- 2 福沢諭吉は、なぜ Statistics を政表と訳したのか
- 3 ベストセラー作家・福沢諭吉の著書における統計の用例



明治の代表的な啓蒙思想家。父は中津藩士で、福沢が生まれた当時は大阪の蔵屋敷詰であった。父の死後中津に戻り、白石常人に師事し、その後大阪に出て、緒方洪庵に蘭学を学ぶ。万延元年(1860)から慶応3年(1867)にかけて幕府の遣欧米使節に3度参加し、『西洋事情』等の著作を通じて欧米文化を紹介した。その頃に『万国政表』(世界統計年鑑に相当)の翻訳を行っていましたが、渡米することになったため、その翻訳を岡本博卿(古川節蔵の著名で著作)に引き継ぎ、帰国後に校閲して(1860年に)刊行しました。慶應4年(1868年)慶應義塾を創設。明治以降官職に就かず、位階勲等を受けなかった。『学問のすすめ』(1872)、『文明論之概略』(1875)など多数の著作を発表した。

【参考資料】、【写真】：国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」

【参考情報】

三田評論 2020年6月号で「福澤諭吉と統計学」が特集されています。

・特集記事の一覧

<https://www.keio-up.co.jp/mita/202006/>

1 福沢諭吉が大隈重信にスタチスチックの仲間らを推薦した書簡について

(本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.3」を基に作成)

1 明治12年1月に福沢諭吉が大隈重信あてた書簡

福沢諭吉と大隈重信の出会いは、明治6年(1873年)になります。それまで、お互いに食わず嫌い、犬猿の仲と思っていました。会ってみたら意気投合し親密な関係となったようです。¹

明治12年1月の福沢諭吉が大隈重信あてた書簡(以下「福沢書簡」といいます。)の内容と現代文へ書き下ろしたものは、別記のとおりです。それによると、福沢は「慶應義塾」塾員ら13名を「スタチスチックの仲間」として推薦しています。ほかに、杉亨二、新井金作、呉文聰を「是ハ統計局の人」として書き添えています。これが何のために書かれた書簡であったかははっきりしませんが、当時、福沢諭吉と大隈重信がスタチスチック(統計)に関する事で密に交流していたことがうかがわれます。

ちなみに、この書簡に名を揚げられた16名のうちの13名は、前年の明治11年12月に創設された製表社(のちの東京統計協会)の創立メンバーでもありました(表参照)。西川俊作「統計学—福澤諭吉から横山雅男へ」によれば、この書簡を「製表社…を結成した慶應義塾の「スタチスチックの[研究]仲間」のリストを添えて、政府に統計院を設けるよう大隈重信に懇願した」(最初に指摘したのは横山雅男である)としています。ただ、そのような解釈を裏付ける資料を確認することはできませんでした。大隈から福沢に人材の推薦を依頼し、それを受けて福沢が人材をリストアップしたのがこの書簡であると解することもできると考えられます。

なお、大隈侯八十五年史第1巻(大隈侯八十五年史編纂会、大正15年(1926年)出版)第5章「(4) 国勢調査の嚆矢」によれば、「君^(大隈)は、明治13年^(1880年)初頭の頃、福沢諭吉に向かって、統計の必要について語り、慶應義塾の秀才が、統計研究に力を致すよう希望し、福沢もまた君の意を了として、統計学の進歩に寄与しようとした。蓋し同塾の新人中には統計の必要を知り同志時々会して研究していたものもあつたと見える。それらの事は、福沢が君に呈した手紙に明白である。」とされています。

¹【参考文献】木村毅「大隈重信は語る」20頁

別記 福沢書簡の内容及び現代文へ書き下ろしたもの

原文²に筆者がルビ、句読点を付与したもの

不順之(ふじゆんの)氣候(きこう)益(ますます)御清穆(ごせいぼく)被成御座(ござならせられ)奉拝賀(はいがたてまつり)。

先日は拝趨(はいすう)御他出前(ごたしゆつまえ)御妨仕(おさまたげつかまつり)恐縮之(きょうしゆく)至(いたり)其節御話スタチスチック之義に付、小幡氏へ御面会も可被成旨(なざるべきむね)早速同人江申聞候処(どうにんへ もうしききそうろうところ)、兼而(かねてより)其志す所何卒御目に掛り様々伺度(うかがいたき)義(ぎ)も有之(これあり)、旁以(かたがたもつて)御都合次第何時に而(しかして)参上(さんじょう)仕度(つかまつりたく)、御序之(おついで)節(せつ)其日時御一報奉願候(ねがいたてまつりそうろう)。

当塾も之社中に而(しかして)旧年来申合時々相談はいたし居候(おりそうろう)様子(ようす)なれと、逆(とて)も人民私之仕事に参るへき(べき)事柄にあらず。

何とか工夫致度(くふういたしたく)と唯々話に日を消し居候(おりそうろう)折柄(おりがら)、偶然に其御省之思召立(おぼしめしたち)何卒尽力為致事(なしいたすこと)に御座候(ござそうろう)。

別紙姓名は先(ま)つ(づ)其仲間之数に候得共(そうらへども)、固(もと)より特に其道に長したる人物と申にあらず、或は事を為す間に退屈して脱社する者もあらん、旅行する者もあらん。唯今は有志と称する人之名を挙げたるまで之事に候得者(そうらへば)、決して当てに者被成(なざるもの)下間敷候(くださるまじくそうろう)。右は要用而已(ようようのみ)申上度(もうしあげたく)。

早々頓首(としんしゅ)

(明治十二年) ³一月卅一日

福澤諭吉

[別紙] (略) ⇒別表参照

現代文へ書き下ろしたもの

(時候のあいさつ)。

先日は外出前に急に訪問し恐縮です。そのときお話のあった、スタチスチックのことについて、小幡氏へ面会すべく、早速、その旨、同人へお聞きしているところ、かねて、その志すところ何とぞお目にかかり、様々、伺いたいこともあります。どっちみち、御都合つき次第、その日時をついでの節に御一報願います。

当塾もこの社に対して、こうして何年もの間、時々相談していますが、とても、一般人の私が参上すべき事柄ではありません。

何とか工夫いたしたいと、ただただ、話に日を消化していた折、ふとしたことから、御省(大蔵省)の思いに協力できることになりました。

別紙にあげた姓名は、まず、その(スタチスチックの)仲間ではありますが、もとより、その道に長けている人物と言えるものではなく、あるいは、事をなす間に退屈して脱社、旅行するものもいます。ただ、今の段階では、有志と称する人の名をあげたまでありますので、決して当てにさせていただきませんよう。とりあえず用件のみ申し上げます。

早々頓首

(明治十二年) 一月三十一日

福澤諭吉
大隈先生侍史

別表 福澤書簡 [別紙] にリストアップされた 16 名

スタチスチックの仲間		是ハ統計局の人
小幡篤次郎*	伊東銓一郎*	杉亨二*
阿部泰蔵*	高木怡荘	新井金作*
猪飼麻次郎*	古渡資秀	呉文聰
森下岩楠*	須田辰次郎*	
森嶋修太郎*	四屋純三郎*	
吉川泰次郎*	高力衛門*	
日原昌造*		

注：*が付された人は、製表社の創立メンバー

2 福沢書簡の年次とその時代

伊藤廣一「統計歴史散歩」21 頁によれば、福沢諭吉が大隈重信あててスタチスチック仲間を推薦した書簡について、「横山雅男は、製表社創立当時の顔ぶれと(書簡の)別紙の顔ぶれとほとんど同じであることから、明治 12 年(1879 年)ではないかと推察しているが、もしそうであれば既に製表社は発足した後であることから、何を大隈に頼もうとしたのかははっきりしない」としています。

また、早稲田大学図書館所蔵市島謙吉編「大隈家収蔵文書」(抄録)下(早稲田大学大学史資料センター編)でも、かつこ書で「明治 12 年」と補足しています。いずれにしても、その年次については「明治 12 年」とする説のみでそれ以外の年次を主張する説は存在していません。

ちなみに、総務省統計局HPの「なるほど統計学園」によれば「大隈は明治政府の第 4 代大蔵卿(現在の財務大臣)として財政整理に当たっているうちに正確な統計の必要を感じ、統計院の設立を建議し、自ら初代の院長に就任して統計整備の先頭に立ちました。」とあり、大隈が第 4 代大蔵卿であったのは、明治 6 年 10 月 25 日～明治 13 年 2 月 28 日であることから、福澤書簡の「偶然に其御省之思召立(おぼしめしたち)何卒(なしいたすこと) 尽力為致事(ござそうろう)に御座候」の「御省」は大蔵省であると推察され、大蔵卿である大隈重信から何らかの協力を求められて、スタチスチックの仲間らを紹介する書簡を發出したものと考えられます。

ここで、製表社の創設の動きをみると、福澤書簡でスタチスチックの仲間の一人としてリストアップされた小幡篤次郎らが中心となり、製表社は明治 11 年 12 月に創設されました(前述のとおり創立当時の会員の多くは福澤書簡の別紙で挙げた義塾出身又はその関係者と一致)。このことを考えると、その著書(「文明論之概略」など)でスタチスチック(統計)

²【参考】書写資料は、早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号：リ 05_05880_0010 大隈家収蔵文書 第 10 冊 119 コマ～122 コマ)で閲覧可能

³ 早稲田大学図書館所蔵 市島謙吉編「大隈家収蔵文書」(抄録)下(早稲田大学大学史資料センター編)では、日付について、かつこ書で「明治 12 年」と補足している。

の重要性を指摘する福沢の思いを通じて、小幡篤次郎らによる製表社の創設に向けた原動力になったことも考えられます。ちなみに、福沢書簡でも、時候のあいさつの次のパラグラフで小幡の名前が出てきます。

製表社の創設の翌年、明治12年2月に渡辺洪基、馬屋原彰、小野梓も統計に関する学会を起す企画があり、これを杉亨二に相談したところ、杉はその趣旨は、製表社と概ね同様であることから、協議の結果、同年3月6日これを合一することに決し、更に委員を挙げて規則案を作らせ、4月1日にこれを議定し、その名称を統計協会（のちの東京統計協会）と改称し、幹事に渡辺洪基、小野梓、阿部泰蔵、矢野文雄、小幡篤次郎の五名を挙げて諸般の事を委任したとされています。⁴

ここで、**小野梓**は、**大隈重信のブレン**（立憲改進黨、東京専門学校（のちの早稲田大学）の創設に深くかかわる）として有名です。また、**阿部泰蔵**（本邦初の生命保険会社創設者。日本ではじめて統計処理により算出される予定死亡率などから保険料を導いた近代的生命保険事業として誕生させた）、**矢野文雄**、**小幡篤次郎は言わば福沢の門下生**（慶應義塾塾員）で、このうち、阿部、小幡は、福沢書簡のスタチスチックの仲間としてリストアップされています。矢野は、福沢と大隈の交流が縁で、大隈の宅に来るようになり、とうとう大隈の側近になってしまったとされています。⁵また、矢野は、いぬかいつよし犬養毅、尾崎行雄とともに明治14年に設立された統計院（院長は大隈重信）に勤務しました。

このように、明治12年1月の福沢書簡の後、同年4月、製表社との合体による統計協会の設立、明治14年4月、大隈重信による統計院の設立の建議、同年5月、大隈自らの院長就任と展開し、その中で福沢の門下生（慶應義塾塾員）や大隈の側近が深く関わっています。言わば福沢書簡による人材の紹介は、我が国の統計史にとって重要な位置づけにあると言えるのかもしれませんが。

3 福沢書簡の年次とその別紙で「是ハ統計局の人」と注記していることについて

伊藤廣一「統計歴史散歩」21頁によれば、書簡の別紙で「是ハ統計局の人」と注記していることについて、統計局ができたのは明治18年（1885年）（内閣統計局）のことであり、明治12年は（太政官）政表掛であったことからいささか疑問

の残ることを指摘しています。

前述のとおり、大隈重信は大蔵省の立場で、正確な統計の必要を感じ、アメリカのような統計ビューロー（統計局）の組織の創設について福沢に相談していた可能性も考えられます。ちなみに、Bureauについて、幕末から明治初期に出版された英和辞書を見ると、調べた範囲では、明治6年出版の英和字彙で「局」の訳字が初めて登場しています。

大隈は福沢に統計ビューロー（統計局）の中心的役割を担うことが期待される人材の推薦を依頼し、福沢はこれを受けて「是ハ統計局の人」と注記したのではないかと推察することもできるのではないかと考えられます。

4 大隈の統計院設立構想と統計観

大隈重信は、明治14年（1881年）に統計院の設立を建議し、自ら院長に就任しましたが、その2年前の福沢書簡は、大隈の統計院設立構想に何らかの影響を与えたのかもしれませんが。

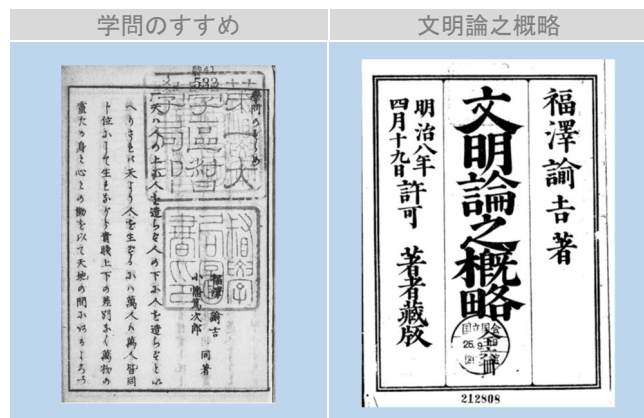
大隈の統計院設立構想と統計観については、明治31年の統計懇話会における大隈の演説⁶から読み取ることができません。それによれば「…熱心なる杉君なりその当時人口を調査して一つ…行ってみようと言うので、試験として甲斐国一国をやったその時の勢いでいけばよほど疾に進まねばならぬ。それから、（統計は、）とても大蔵省ではいかぬ。十分強い権力をもってやらなくちゃどうしても各省各箇でもってやるようなことではいかぬ、何と任じて大蔵省だけではいかぬ、そこで中央に統計院をこしら拵えて…一つの大きな組織でやるとなったものだから…自分（大隈）の道楽のことには大きなことをやるというので余程攻撃を受けました。しかし、これは決して道楽ではない。…統計院それから会計検査院二つを拵えた。十分中央に権力を集めて行政の整理をこれから行っていこうという企て、政略と真に統計を進歩させようという二つのものが結びついて地位の高いものを拵えた。…」としています。さらに、「…議論で国政をやっていく 政治も社会も學術も悉く議論である、その議論の根拠には何を以てして行くかと云ふと是非一つの学理から拠る所のものがなければならぬ、あるいは漠然たる理想、漠然たる想像これだけでは一向議論の根拠がかたくない、段々議論が進んでいくにしたがって議論を決するものは一つの証拠である、…この問題は何で決するか ここに拠るべき統計があるか、な

⁴【参考文献】東京統計協会「東京統計協会沿革略誌」

⁵【参考文献】木村毅「大隈重信は語る」21頁

⁶ 明治31年6月25日第4回統計懇話会における大隈重信の演説（統計集誌第205号所収）

いかである」と論じ、大隈はE B P M (事実・根拠に基づく政策立案)の視点でも統計をみていることは現代にも通用することであると言えます。福沢の「学問のすすめ」、「文明論之概略」などの著書でも統計の重要性が論じられており、大隈と福沢の統計観については二人の間で共通する部分があったと考えられます。



【画像】：国立国会図書館デジタルコレクション

5 福沢書簡がもたらしたもの

福沢書簡の現代文への書き下ろしについては、必ずしも微妙なニュアンスを踏まえた解説を加えるレベルには至らなかった面があることは否めませんが、福沢書簡の大意はある程度理解できました。

福沢書簡からも、明治初期に大隈重信と福沢諭吉の二人の偉人の交遊関係がいかに関与して政府統計の発達(国勢調査の実現などに貢献した統計結社の創設、統計院設立)のための原動力になったかをうかがい知ることができると思います。

「学問のすすめ」(第13編)⁷(ひらがな表記にし、句読点を加えたもの)

古来若しこの大悪事に付きその数を記したる「スタチステク」の表ありて御殿に行われたる毒害の数と、世間に行われたる毒害の数とを比較することあらば、御殿に悪事の盛なること断じて知るべし。

此法は人間の事業を察して其利害得失を明にするため欠く可らざるものにて、近來西洋の学者は専ら此法を用ひて事物の探索に所得多しと云ふ。

凡そ土地人民の多少、物価賃銭の高低、婚する者、生るゝ者、病に罹る者、死する者等、一々其数を記して表を作り、此彼相比较するときは、世間の事情、これを探るに由なきものも、一目して瞭然たることあり。

「文明論之概略」(巻之2)⁸(ひらがな表記にし、句読点を加えたもの)

天下の形勢は一事一物に就て臆断す可きものに非ず。必ずしも広く事物の働を見て一般の実跡に顕はるゝ所を察し、此と彼とを比較するに非ざれば真の情実を明にするに足らず。斯の如く広く実際に就て詮索するの法を、西洋の語にて「スタチステク」と名く。

此法は人間の事業を察して其利害得失を明にするため欠く可らざるものにて、近來西洋の学者は専ら此法を用ひて事物の探索に所得多しと云ふ。

凡そ土地人民の多少、物価賃銭の高低、婚する者、生るゝ者、病に罹る者、死する者等、一々其数を記して表を作り、此彼相比较するときは、世間の事情、これを探るに由なきものも、一目して瞭然たることあり

⁷【参考資料】慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション (デジタルで読む福澤諭吉)「学問のすすめ」

⁸【参考資料】国立国会図書館デジタルコレクション「文明論之概略」

2 福沢諭吉は、なぜ Statistics を政表と訳したのか

(本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.7」を基に作成)

1 万国政表とは

「万国政表」(万延元年(1860年)刊行)は、世界の国々について、面積、人口、政治体制、生産物などが掲載されており、西洋の統計書の日本における最古の翻訳書です。「Statistics」に「政表」という訳語をつけたのは、本書が最初です。凡例において「スターチスチセ、ターフル、ファン、アルレ、ランゲン、デル、ア、ルデ」を「万国政表」の義としています。

ちなみに、赤松則良は、咸臨丸で渡米の際、福沢諭吉らと一緒にした。その縁で、赤松則良は、福沢が翻訳に関わった「万国政表」を所蔵していたのかもしれませんが。初めは福沢諭吉が翻訳に取り組みましたが、咸臨丸で渡米することとなったため、岡本博卿が後を継ぎ、帰国後に福沢関として出版しました。「万国政表」は、我が国で唯一、磐田市立図書館(静岡県)の電子書籍サービスのサイトで提供されています。

「万国政表」は、なぜ、磐田市立図書館(静岡県)にある？

「万国政表」は、昭和42年(1967年)に、元磐田市の赤松照彦市長より、磐田市立図書館に寄贈された赤松文庫の資料の一つです。

「赤松文庫」は、江戸時代初期から明治・大正にかけての幅広い分野の貴重な資料約3,300冊で、同市長の祖父である赤松則良らが所蔵していたものです。

2 福沢は、なぜ政表と訳したのか

岡部進「福澤諭吉と「スタチスチク」一校閲書『萬國政表』(万延元年・1860年)を中心に」(日本大学工学部紀要第38巻、平成9年(1997年))によれば、「福沢諭吉は、『万国政表』から「万国ノ形勢ヲ察スル」(凡例)ことができ、これこそ世界の状況を知るには好都合な資料であると思ったのであろう。…これを(掲載項目:面積、人口、政治体制、生産物など)みると、『万国政表』は確かに「国家の状態」を示す「国勢」表といってもよいくらいで、だから「政表」と訳したのであろう。」としています。

3 政表の訳字の用例

福沢が関わった「万国政表」(万延元年(1860年)刊行)で「Statistics」を初めて「政表」と訳した後、文久2年(1862

年)には、西周と津田真道⁹が、幕命でオランダ留学し、その時のフィッセリングによる五科(参考1)、学習の際の授業の道筋および講義の根本方針を記述¹⁰した「性法万国公法国法制産学政表口訣」(参考2)で「政表」の用語が登場するとともに、西周がフィッセリングの講義「性法説約」の巻首として起草¹¹した「記五科授業之略」(参考3)で「政表之学」の用語が登場しています。さらに、津田真道が、オランダ留学において学んだフィッセリングの講義を翻訳した「表紀提綱一名政表学論」(明治7年(1874年)太政官政表課刊行)でも「政表学」と「政表」の用語が登場しています。

また、明治4年6月に岩倉使節団のため太政官で「日本政表」、「日本国勢便覧」を編集し、同年12月に太政官に「政表課」が置かれ、明治5年に「辛未政表」が刊行(我が国最古の総合統計書。以降、明治6年「壬申政表」、明治8年「明治6年日本政表」、明治11年分まで刊行。)され、これらにおいて「政表」の用語が登場しています。

その後、太政官政表課は、明治14年には太政官統計院となり、総合統計書である「日本政表」も明治15年には「統計年鑑」として刊行され、徐々に「統計」という用語が使われ始め、それとともに「政表」という用語は使われなくなりました。

【参考1】

国立国会図書館HP「江戸時代の日蘭交流」によれば、「西周と津田真道の二人は、オランダのライデン大学において経済学、政治学を教えていたフィッセリング(Simon Vissering 1818-1888)に、次の五科目を学んでいる。①性法之学(Natuurrecht 自然法)、②万国公法之学(Volkenrecht 国際公法)、③国法之学(Staatsrecht 国法学)、④制産之学(Staatshuishoudkunde 経済学)、⑤政表之学(Statistiek 統計学)。これらを「五科」と称し、帰国後は、その講義を翻訳、刊行している。」とされています。

【参考2】「性法万国公法国法制産学政表口訣」¹²

原文にルビを加えたもの	現代文への書き下ろし
政表に於て之 <small>(これ)</small> 而 <small>(しこうし)</small> て國の情状如何を察する其 <small>(その)</small> 周密を悉 <small>(つく)</small> すの術 <small>(すべ)</small> を以てすと云ふ	政表においては、これはこのようにして国の情状がどうなっているかを理解し、すみずみまで知り尽くす方法を示すことをいう。

【参考3】「記五科授業之略」¹³

原文	現代文への書き下ろし
政表之学於察國之情状為何悉其周密之術也	政表之学は、国の情状がどうなっているかを理解し、すみずみまで知り尽くす方法である。

⁹ 西周と津田真道のプロフィール：統計図書館コラム【人物編】No.3

¹⁰ 【参考資料】：国立国会図書館HP「江戸時代の日蘭交流」

¹¹ 同上

¹² 「性法万国公法国法制産学政表口訣」国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3851067/1>

¹³ 「記五科授業之略」国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3851066/1>

4 雑感

「政表」は、「万国政表」の凡例のほか、西と津田の「性法万国公法国法制産学政表口訣」や「記五科授業之略」の資料から、国家（政府）の状態を明らかにする表の意味であることが分かります。

正確な「政表」は、客観的にものごとをとらえ、他の属性との比較などの実態把握を可能とし、政策目標の設定、政策評価などの基礎となり、まさに国家の統治の基本に関するものであると言えると思います。

5 政表という訳語に定着した可能性も？！

宮川公男「統計学の日本史」によれば、「統計という訳語が最終的に定着したことには何ら問題はないにせよ、政表という語がその有力な代替候補であった事実は、スタチスチックが単なる方法の学でなかったという統計学の発生の歴史を銘記するためにも、また現代社会において統計学が持っている真に重要な役割を再認識するためにも忘れてはならないことである」とされています。

筆者は、総務省統計局HPに掲載した統計 Today No.136において「現代では、当たり前のように使用されている「統計」というコトバも、調べてみると明治の先人たちの熱い思い（無責任な統計の作成を許さないという戒めを含む。）が伝わってきます。そして、私たちは、このことを冷静に後世に伝えなければならないのです。」としましたが、「政表」の用語を調べれば調べるほど、「統計」は、国家の統治の基本に関するものであることを肝に銘じなければならないと感じる次第です。

3 ペストセラ作家・福沢諭吉の著書における統計の用例

（本稿は総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.2」を基に作成）

1 福沢の著書における「統計」に係る用語の掲載状況

福沢諭吉の著書における「統計」に係る用語の掲載状況を調べた結果は、別表のとおりです。調べ方は、慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションに掲載の福沢の著書について、当該サイトの検索機能を利用して「統計」の用語をキーワードとして検索することにより行いました。

2 学問のすすめ、文明論之概略では「統計」の用例なし

明治7年(1874)12月、明治8年4月に出版された「学問のすすめ(第13編)」¹⁴、「文明論之概略(巻之2)」¹⁵では「統計」の用例はなく、「スタチスチック」の用例があります。

これらの著書においてスタチスチックの有用性についても言及し、その上で国民に自立を、また、文明開化を通じて人々の意識改革を促し、日本の未来を創造しようとしたように思います。「スタチスチック」の用語は、原語をムリに訳さず原語を使用すべきと主張した杉亨二の影響を受けた可能性も考えられます。二人は明六社で親交があったとみられます。

3 福沢の著書で「統計」の用語の初出は「分権論」

明治10年(1877年)11月に出版された「分権論」のなかで「統計表」が用いられ、それ以降の福沢の著書では一貫して「統計」が用いられています。これは、明治7年6月に出版されたモロー・ド・ジョンネ著、箕作麟祥訳「統計学」(文部省)において「スタチスチック」を「統計学」と訳していることなども影響しているものと考えられます。

ちなみに、箕作麟祥は、元治元年(1864年)10月、外国奉行支配翻訳御用頭取を命ぜられ、福沢諭吉、福池源一郎等とともに翻訳に従事し、その後、福沢らとともに明六社のメンバーとして親交があったと考えられます。

また、明六社発足の頃、福沢諭吉と大隈重信との親交が始まり、二人の会話で「統計」という言葉が飛び交っていたのかも知れません。

¹⁴ 統計図書館ミニトピックスNo.4 参照

¹⁵ 本稿の「福沢諭吉が大隈重信にスタチスチックの仲間らを推薦した書簡について」の4参照

別表 福沢諭吉の著書における「統計」に係る用語の一覧表

出版時期	書名	統計に係る用語
(1860)万延元年	万国政表*	政表 ¹⁶
	注：凡例において「スターチステ、ターフル、ファン、アルレ、ランデン、デル、ア、ルデ」を「万国政表」の義としている	
(1871)明治4年7月	伊藤博文の建議に基づき大蔵省に統計司を置く（8月統計寮と改称）	
(1871)明治4年12月	太政官正院に政表課を置く	
(1873)明治6年1月	「附音挿図英和字彙」初版で、「Statistics」を「国誌、統計表、国誌学」と訳す。	
(1874)明治7年6月	モロー・ド・ジョンネ著、箕作麟祥訳「統計学」（文部省）出版 ※第1巻の凡例において、統計学について「此學原名フスタチスチックト云ヒ其説ク所ハ皆算數ヲ以テ國內百般ノ事ヲ表明シ治國安民ノ為メ最緊要ノ者タリ」と記述。	
(1874)明治7年10月	シモン・ヒッセリング述、津田真道訳の「表紀提綱一名政表学論」を刊行する	
(1874)明治7年12月	学問のすゝめ*（第13編）	スタチスチックの表 ¹⁷
(1875)明治8年4月	文明論之概略* 卷之2	スタチスチック：12コマ スタチスチックの表：13コマ
(1877)明治10年11月	分権論 ¹⁸	統計表：60コマ スタチスチック：60コマ
(1877)明治10年12月	民間経済録 ¹⁹ 初編	統計：42コマ 3府60県の明治7年中の盗賊の害に係るデータを引用（明治7年日本政表）
(1878)明治11年5月	通貨論 ²⁰	統計局：19コマ 明治元年～同4年の外国米の輸入に係る統計データを引用
(1879)明治12年8月	福澤文集 ²¹ 二編 卷二	統計表：30コマ
(1880)明治13年8月	民間経済録 二編	統計表：55コマ
(1881)明治14年5月	太政官に統計院設置	
(1881)明治14年9月	時事小言 ²²	統計、統計表 ²³
(1882)明治15年	統計院「統計年鑑」出版	
(1884)明治17年1月	全国徴兵論 ²⁴	統計年鑑：8コマ 注：統計年鑑の明治13年人口を引用 統計：26コマ
(1885)明治18年12月	士人處世論 ²⁵	統計表：6コマ
(1886)明治19年	統計院は廃止、内閣に統計局設置	
(1889)明治22年	森鷗外と今井武夫の統計訳字論争	
(1892)明治25年6月	国会の前途・国会難局の由来・治安小言・地租論 ²⁶	統計、統計表 ²⁷
(1897)明治30年7月	福翁百話 ²⁸	統計：18コマ、68コマ、161コマ、162コマ 統計学：131コマ

¹⁶ 磐田市立図書館（静岡県）の電子書籍サービス「万国政表」の5コマ

¹⁷ 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション（デジタルで読む福澤諭吉）「学問のすゝめ（第13編）」の8コマ

¹⁸ 「分権論」は、明治政府の中央集権的傾向を批判して、政治を分けて、政権は中央政府の手に収め、治権は地方に移譲して人民自治の気風を興すべきことを説いたもの

¹⁹ 「民間経済録」は、初学のための経済原論ともいうべきもの。西洋学説丸抜きの経済論の行われていたその当時において、日本経済の実状に即した経済論を展開している点に注目すべき著書

²⁰ 「通貨論」は、西南戦争による紙幣増発のため銀紙の間が著しく開いた通貨価値の急変に対する時事評論で、福沢はこの書を著わすために大蔵省の金庫を見学し、日本貨幣の沿革や西洋諸国の通貨事情に関する文献を大蔵卿大隈重信の手を通じて借り出して研究し、冒頭の一節だけは慶應義塾から出ていた「民間雑誌」と題する日刊新聞に発表した。その続稿は書き卸しのまま単行本として出版したもの

²¹ 「福澤文集」は、「家庭叢談」、「民間雑誌」その他の新聞雑誌に寄稿した福沢の短かい文章や演説の原稿などを集めた文集

²² 「時事小言」は、初め「国会論」の続編のつもりで起草され、後に「時事小言」と題して明治14年の秋に出版されたもの

²³ 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション（デジタルで読む福澤諭吉）「時事小言」。統計：130コマ、204コマ、313コマ、統計表：306コマ

²⁴ 明治16年4月5日から7日まで3回にわたって「全国兵は字義の如く全国なる可し」と題する社説を連載し、次いで明治17年1月4日から7日まで三回にわたり「改正徴兵令」と題する社説を掲げ、「全国徴兵論」は、これらの二編の社説を併せて一本にまとめ明治17年1月に刊行したもの

²⁵ 「士人處世論」は、明治の士人が立身の道をひたすら官途に求めて政府の小吏となって満足するが如き風潮を批判し、士人處世の方向は官途以外に無限に広いことを論じたもの

²⁶ 「国会の前途・国会難局の由来・治安小言・地租論」は、明治22年の憲法発布以来「時事新報」は社説に帝国議会のことに論及するものが少なくなかったが、その代表的論説四編を一編としてまとめたもの

²⁷ 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション（デジタルで読む福澤諭吉）「国会の前途・国会難局の由来・治安小言・地租論」。統計：50コマ、100コマ、統計表：113コマ

²⁸ 「福翁百話」は、福沢が随時、客と談話した話題を書きとめておいたものの中から百題を選んでとりまとめたもの

* 総務省統計局HP「統計の黎明とその歴史」の「統計の偉人たち（福澤諭吉）」参照

【参考】 福沢諭吉の著書における「統計」に係る用語の具体的な掲載内容

福沢諭吉の著書における「統計」に係る用語の具体的な掲載内容の一部を紹介します。

注：【】は国立国会図書館デジタルコレクションの該当頁のコマ

(1) 「分権論」

明治10年(1877年)出版の「分権論」で「統計表」、「スタチスチック」が用いられており、調べた範囲では、福沢諭吉の著書で最初に「統計」の用語が登場しています。

●「分権論」で「統計表」、「スタチスチック」が用いられている箇所

【60コマ】

附録

一 本編は地方分権の大略を論じたるものなれども、分権の議論あれば分財の議論も亦なかるべからず。蓋し権と財とは大概その通行の路を共にして、権の集る所には財も亦集り、権の分るゝ所には財も亦共に分るゝものなり。故に今別に一編の分財論を著して、始めて本編の意を全うすべしと雖ども、理財の事を吟味するには、先ず**統計表**の詳なるものなかるべからず。即ち西洋に所謂「**スタチスチック**」是なり。然るに旧幕府の時代、固(もと)よりこの表を記したるものあらざれば、今日に在ては博く諸書を詮索して、先ず之を**統計表**の形に作り、その表を以て理財の本義に照合して、始て分財、集財の得失をも明にすべきことなれども、その事業を企てんとするも、数月の労を以て能すべきに非ず。加之維新以来の政府の会計とても、その細密なる精算を知るべからざれば、止を得ず分財の議論は之を他日に譲り、唯この議論に就き我輩が目的とする所の吟味の趣向を示すこ左の如きのみ。今日にても世上有志の士に、この吟味の路を得てよくその力を尽し、国財分集の利害得失を明【に】する者あらば、独り余輩の悦ぶのみならず、社会一般の大幸と云うべし。

(2) 「民間経済録」

明治10年(1877年)出版の「民間経済録 初編」において、明治初期の総合統計書である太政官調査局「明治7年日本政表」(警察の部)における3府60県の明治7年中の盗賊の害に係る統計が引用されています。調べた範囲では、福沢諭吉の著書で最初に総合統計書の統計データが引用されています。

●「民間経済録」で明治7年中の盗賊の害に係る統計データが引用されている箇所

【初編 42コマ】

既に日本に於ても明治七年中の**統計**に拠れば、三府六十県にて盗賊の害を蒙りたること左の如し。

殺されし人 八十六人

疵付られし人 二百八十五人

追剥、追落しに遇いし人 四百八十二人

押込に遇いし家 三千二百〇一戸

窃盗に遇いし家 九万〇四百五十八戸

附火にて焼かれし家 六百十二戸

(3) 「通貨論」

明治11年(1878年)出版の「通貨論」で、明治元年~同4年の外国米の輸入に係る統計データが引用されています。そのデータは、東洋経済新報社「日本貿易精覧」輸入品表の「米及び麴」のデータと同じ情報源とみられます。

なお、「統計局の表」の「統計局」については、当時の政府に

その名称の組織は存在しないなど、はっきりしない面もあります。

●「通貨論」で外国米の輸入に係る統計データが引用されている箇所

【19コマ】

統計局の表に拠れば、明治元年、外国米の輸入二千〇九十七万七千二百十斤、代価四十三万五千九百五十五円、同二年、輸入一億六千二百〇七万三千三百二十三斤、代価四百四十三万八千八百八十六円、同三年、輸入五億三千七百七十一万〇七百五十六斤、代価千四百五十九万八千四百十四円、同四年、輸入四千九百九十五万七千八百六十斤、代価百二十六万〇百七十八円なりと云う。

(4) 「全国徴兵論」

明治17年(1884年)出版の「全国徴兵論」では、「統計年鑑」(明治15年出版)の明治13年人口が引用され、徴兵の対象となる20歳以上50歳未満の男子人口(母数)を推計しています。

●「全国徴兵論」で「統計年鑑」の明治13年人口が引用されている箇所

【8コマ】

故に寧ろ免役料の名に代るに兵役税の文字を以てして全国の男子唯皇族を除くの外一名も免すことなく生れて二十歳に至れば三ヶ年の間身躬から役に服する歟、然らざれば三ヶ年の間兵役税を納めしめて其常備軍役を免すること公平至当の法ならんと信ず右の主義果して公平至当ならば其実施の法を案ずるに**統計年鑑**明治十三年人口の調に全国の男子二十年以上五十年未満の者七百五十八万五千三百三十八名とあり之を三十分して其割合は少者の方多かるべきが故に満二十年の者は大数二十六万と仮定…(以下略)

(5) 「福翁百話」

明治30年(1897年)出版の「福翁百話」では、「統計」の用語が用いられ、統計の重要性を説いています。特に、「苟いやしくもこの統計全体の思想なき人は共に文明の事を語るに足らざるなり。」とまで断じていることから、福沢の統計に対する熱い思いが伝わってきます。

●「福翁百話」で「統計」が用いられている箇所

【161コマ】 人間社会の進歩とは凡そ右等の事情にして誠に分り切ったることなるに、彼の尚古論者が兎角古風に恋着して前進の道知らざるこそ奇態なれ。啻に前進を知らざるのみならず、時として之を妨るに至る。その愚は殆んど測るべからざるに似たれども、元来彼輩の思想は至極簡単にして、殊に数字**統計**の何物たるを知らず、単に和漢の歴史を通読して往々自分の心に感じたる所を記憶し、是れは善し其れは悪しと判断を下して局部の善悪に眼を注ぎ、眼孔豆の如くにして全面的利害を視るの明なきが故に、知らず識らずして自から迷の淵に沈むことなり。

【162コマ】 文明進歩の目的は国民全体を平均して最大多数の最大幸福に在るのみならず、その幸福の性質をして次第に上進せしむるに在り。歴史百千年の前後を比較してこの幸福の数果して増したるや減じたるや、幸福の性質上進したるや低落したるや、即ち是れ**統計**の数字に見るべき所にして、我輩は断じてその増進を明言して尚ほ未来の望を抱く者なり。苟もこの**統計**全体の思想なき人は共に文明の事を語るに足らざるなり。

【脚注 18~28 における福沢の著書の説明文の参考資料】: 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション